

## 販売中！ コロナの日々ー私とコロナと3年間



2020年初頭に始まり、2023年5月に5類に移行するまで、猛威と社会的混乱と暮らしの不自由さを強いたコロナ禍。34名の方々の思いやつづやきを集めた小冊子『コロナの日々』を作りました。コロナ禍を忘れないために、しっかり振り返るために、これはあなたの身近で起きていた、あの頃の記憶を集めた貴重な小冊子です。購読ご希望の方は「生き生き政治ネット」事務所までご連絡下さい。

『コロナの日々ー私とコロナと3年間ー』（A4判 54ページ）

発行 コロナを記憶する会 2024年7月7日

頒価 500円

## INFORMATION



武井県議は、12月4日(水)11:00から、愛媛県議会12月定例会で、一般質問を行ないます。ぜひ傍聴にお越しください。

### 伊方原発運転差止訴訟 松山地裁勝訴判決に向けて 提訴13年記念講演会&スタンディングアピール

日時：12月7日(土) 10:00~13:00

会場：コムズ(松山市男女共同参画推進センター) 5F大会議室

講師：北野進さん(志賀原発廃炉に！訴訟原告団長)

講演会后、市内5地点で同時スタンディングアピール行動

松山市駅前、愛媛県庁前、大街道一番町口、南堀端(城山公園南口)

四国電力原子力本部前

主催：伊方原発を止める会 (Tel089-948-9990)

### 何もきかない、何もいわない支援から見えてくる ママ、子ども、女性たちのリアル

日時：12月7日(土) 13:00~15:00

会場：愛媛県民文化会館 別館第11会議室

講師：寺内順子さん(シンママ大阪応援団理事)

弘中由美子さん(愛媛生協病院 医療福祉相談室)

久保友里恵さん(愛媛弁護士会)

連絡先：いのちのとりで裁判愛媛アクション事務局 えひめ民医連 (Tel089-990-8677)

### 第23回 12・8不戦のつどい 「戦争する国づくりと陸自松山駐屯地の変貌」

日時：12月8日(日) 14:00~16:00

場所：愛媛県美術館講堂

講師：吉田寛さん(愛媛民報記者)

企画：祝 日本被団協ノーベル平和賞受賞「模擬」授賞式

主催(共催)：松山市平和資料館をつくる市民の会・えひめ母親大会連絡会

連絡先：taoreiko@yahoo.co.jp

※武井事務所は月曜から金曜の10時~16時に開けています。お気軽にお立ち寄りください。



生き生き政治ネット

松山市衣山2-4-47、2F

TEL/FAX 089-924-2485

ikiiki@cnc.e-catv.ne.jp

2024年11月18日発行

## 衆議院選挙ののち

10月27日、慌ただしく行われた衆議院選挙が終わり、自民・公明が大敗、「一強政治」が終わりを告げました。(とりあえず、そのことのみは良しとしましょう！)

それから2週間を経た今。私は混沌とした気分のままでいます。議会での議論も行われないうまま閣議決定で物事が進む、という心配は、「今は」なくなりました。しかし、各党の動きを見ていると、新たな連立によりまた強力与党の枠組みができるのではないかと、という不安が拭えません。あるいは、自民分裂などをきっかけに、大変動が起こるかも？ それでスッキリした枠組みができるのならよいのですが、もしかすると大政翼賛会的なものになるのでは？ そんなことを思ってしまうくらい、今の日本の右傾化が心配されるのです。そこにアメリカの「マタトラ」政権誕生・・・世界もまた、どこに向かっていくのでしょうか。

そんな中、唯一、希望を見いだしているのが、県内各地の市町選挙です。女性の立候補者が増え、活発な選挙が行われ、徐々に女性議員が増えています。首長選挙も、結果は残念でしたが、それぞれの地域に新しい風を起こしました。

政治は、まず自分達の足下から。それぞれの地元で果敢にチャレンジした女性達、彼女たちによって民主的土壌が培われていくことに、一縷の希望を感じているこの秋です。

大早 直美(生き生き政治ネット共同代表)



市民連合えひめ勝手連、毎月20日、松山市駅前  
で街頭行動を行っています。どなたでもご参加  
頂けます。

## 武井たか子の県議会報告会のご案内

日時 2025年2月11日(火、祝日) 13:30~15:30

会場 松山市民会館 2F 第4会議室 (松山市堀之内)

2024年度の県議会報告会を開催します。「無所属・市民派」の立場で愛媛県政の課題に取り組んだことなどお話しさせていただきます。どうぞお気軽にお越しください。ご参加をお待ちしています。



「生き生き政治ネット通信」メールでの送付をご希望の方は、ご連絡ください。

ikiiki@cnc.e-catv.ne.jp

今年のノーベル平和賞を日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が受賞しました。日本被団協は、原爆投下から11年後の1956年に結成された広島や長崎で被爆した人たちの全国組織です。核兵器廃絶を世界に訴える活動や被爆者の援護を国に求める運動を続けてきました。受賞理由として「核兵器のない世界を実現するための努力」と「核兵器が二度と使われてはならないことを目撃証言を通じて示してきたこと」が挙げられています。12月10日、ノルウェーの首都オスロでの授賞式に出席される松山市在住の日本被団協代表理事・松浦秀人さんにご寄稿いただきました。



松浦秀人さん

## ノーベル平和賞の授賞式参加に思うこと

この度の受賞は、故人を含む有名無名の被爆者が痛苦の被爆体験を国内外でひたすら語り続けたこと、そのことが核兵器使用への倫理的・道徳的な高い壁（ノーベル委員会の言う「核のタブー」）を築いて戦後79年間の核の不使用を実現するとともに、核兵器禁止条約の採択・発効につながったとの認識によるものであり、先人の努力が顕彰された点で、大変有難く嬉しく思っています。

また被爆80年を目前にした受賞は、核兵器禁止条約への日本の参加を求めている私たちへの励みであり、受賞を機に一気に大きくなった日本被団協と被爆者の存在感を活かした活動を展開したいと決意しています。とりわけ証言活動では、被爆者の平均年齢が85歳を超え、体験者から直接話を聞ける最後の世代である方々に、被爆証言を広める好機としたいと考えています。

同時に、今般の授賞はウクライナやガザでの核兵器使用の現実的な危険性が高まっていることへの警鐘であって、喜んでばかりはいられません。

国内でも、敵基地攻撃能力の保有論や核共有論（核シェアリング）等の高まりや南西諸島への基地建設などを見ると、戦争につながるきな臭さが目につきます。

今回オスロでの授賞式に参加しますが、胎内被爆者であり最年少の被爆者でさしたる功績もない私が、たまたま日本被団協の役員であることから与えられた機会です。いまは亡き先人への感謝を胸に、授賞式に参加いたします。

最後に改めて叫びます。

ノーモア・ヒロシマ・ナガサキ  
ノーモア・ヒバクシャ  
ノーモア・ウォー

松浦 秀人

日本被団協 代表理事（四国ブロック選出）  
愛媛県原爆被害者の会 事務局長

2015年4月21日  
ニューヨークでのデモ行進



## えひめ女性議員ネットワーク結成

9月7日、党派を超えた呼びかけに、愛媛の女性議員約60名のうち半数強が集まり、「えひめ女性議員ネットワーク」発足式、記念講演が行われた。

発端となったのは、市川房枝記念会・林陽子理事長の講演会が可能になったことである。国連の女性差別撤廃委員会委員長であった林理事長の講演は、間近に控えた国連委員会による日本への勧告についてであった。日本はジェンダーギャップ指数が146か国中118位と、先進国の中でも低い状況から抜け出せないでいる。男女平等が進まない大きな原因として、女性議員の少なさが挙げられている。意思決定の場に、特に政治の場に女性の意見が反映されない現状を打破しなければならない。

発足式に集まった女性議員からは、議会において未だ後を絶たない女性差別の生々しさが語られた。事例の多さに驚かされた。愛媛県において女性議員を増やせる環境にないことが明かである。選挙区を越えた女性議員交流の必要性や、すでにラインで行われているが、議員として必要な情報の共有、議員希望者への呼びかけなどが、このネットワークの役目だと発足式で痛感させられた。

私は元松山市議会議員として、また市川房枝記念会評議員として関わった。武井議員とは、松山市議時代に会派を共にしていた。今回、えひめ女性議員ネットワークの共同代表となり身の締まる思いだが、武井議員の協力は心強く、感謝する次第である。

篠崎 英代（えひめ女性議員ネットワーク共同代表）



## ドイツの旅を終えて

9月17日から25日まで、ドイツを旅した。農業視察と観光を兼ねた総勢28名のツアーは、主催の村田武さんの交友関係（研究者、JA、食健連、小倉高校の同級生、大阪外大ドイツ語学科の元教え子、さまざまな活動で出会った一般市民など）の幅広さを物語る愉快的な旅であった。ドーハでのトランジットや広大な農園視察を含め、体力を要求されるものだったにも関わらず、平均70歳を超えるメンバーの、好奇心に満ち、フレンドリーな応対に癒やされ笑い学びを得ての帰国となった。

ベルリンでは、旧東ドイツに住んでいたという女性ガイドさんから苦難の歴史を聴き、戦争の遺物（壁や資料館、壊された教会）を見て回った。ドレスデンのオペラ座やサンスーシー宮殿なども見学し、栄華の部分も垣間見た。

農場見学では牛の肥育と小麦の有機農業を行っている家族経営の農園（30代の経営者、父からの移譲）とミュンヘン近郊で3,500世帯の契約者を対象に有機農業による農産物の販売・配布を行っている農場（代表は元IT企業勤めの40歳代）を見学した。ドイツでは農業に対する助成金もあり、有機農業という価値が一定の国民に受け入れられているという状況が、若い経営者に生きがいと自負心を持たせているように思えた。

旅は出会いである。異国の文化と歴史に触れ、料理と美酒（毎日ビールとワイン三昧）に酔い、食卓を囲んで初めての人と語り合い、親睦を深め、互いの生きてきた人生の一端を分かち合いながら、修学旅行のような気分で毎日をおすごしたあの奇跡のような9日間が、今も熾火のように私を温め、生きる活力となっている。

渡邊 桂子（生き生き政治ネット世話人）



戦争の傷跡